

小学校教師が抱える現場における困難性と 教師経験による意識の差に関する研究

大 前 暁 政

1. 研究の背景と問題

1-1 研究の背景

2012年の中央教育審議会答申では、これからの教員に求められる資質能力の一つとして、「専門職としての高度な知識・技能」が挙げられ、その具体例として「教科や教職に関する高度な専門的知識」、「新たな学びを展開できる実践的指導力」、「教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力」が示されている。そして、「初任者が実践的指導力やコミュニケーション力、チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付けていないことなどが指摘されている」ことから、「教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている。」としている¹⁾。

2015年の中央教育審議会では、学校を取り巻く環境変化として、「近年の教員の大量退職、大量採用の影響等により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要である。」としている²⁾。

以上のように、教師には、専門職として高度な知識・技能を身に付けることが求められており、教師力を向上させるためには、学校現場に

出てから、先輩教員からの知識・技能の伝承に頼るだけでは不十分であり、教員養成課程において、教師に必要な知識・技能を確実に身に付け、実践的な指導力を養うことが求められていると言える。

1-2 現場教師が抱える困難性に関する研究の動向

かつての学校現場では、初任者段階において学級経営や授業に苦慮している教員が多く見られ、その報告や研究がなされていた。古くには、国立教育研究所が1956年に行った新卒教員への調査があり、小学校に関して、教科指導や生徒指導で困難性を抱えている状況が報告されている³⁾。現在も、初任者段階での困難性への調査・研究が継続的に行われており、教科指導や生徒指導などに関して困難性を抱えていることが報告されている⁴⁾。

しかしながら、1990年代後半になり、ベテラン教員が受けもった学級においても荒れが見られるようになり、学級経営や授業を行うのに苦慮している実態が報告されるようになった⁵⁾。また、学級の荒れは、高学年ばかりでなく低学年にも広がりつつあることが報告されるようになり、教職経験に関わらず、どの教師にも起こりえることが指摘されるようになってきた⁶⁾。

学校現場の教師が、学校現場の様々な仕事に

関して、どのような困難性やストレスを抱えているかについては先行研究がある。

例えば、小橋（2013）は、小中学校教師のストレスとバーンアウト、離職意志との関連を検討した研究で、職場環境に関する2因子（多忙感、負担感）がバーンアウトと関連が強いことを明らかにし、バーンアウトを介して離職意志へいたる職場環境ストレスの影響力は、多忙感よりも負担感の方が大きいことを報告している⁷⁾。

川瀬（2014）は、小中学校の教員を対象に、教師バーンアウトの実態と特徴を明らかにする研究を行い、教師バーンアウトとストレスとの関係を検討した結果、「児童生徒との関係」が教師バーンアウトの最も大きな原因であったことを報告している⁸⁾。

教師の抱えるストレスに、誰がどうサポートしていくのかに関する研究も多く、例えば、松本ら（2011）は、教師を取り巻く諸問題や教師が求める支援・求められる能力などを整理し、教育現場における心理的サポートの在り方を提案している⁹⁾。

石田（2008）は、教師の抱える教育実践上の問題・課題について、小学校、中学校、高等学校にアンケートを行い、学校間で差があったのは、「日々の授業の技術や方法について」や、「クラブ・部活動の指導について」、「いじめの指導について」、「非行傾向の児童生徒の指導について」、「校長や教頭などの学校管理者との関係について」などがあったことを報告している。さらに、「多くの問題・課題を抱えている」、「問題・課題を抱えている」と回答した者の割合で、80%以上の回答があったのは、小学校が「学習面指導」、「教材開発」、「学力向上」の3項目であり、反対に80%以上の教師が、「(あまり・ほとんど) 問題・課題を抱えていない」と回答したのは、小学校で「同僚関係」、「学校管理者

との関係」、「児童との関係」、「非行少年」であったことを報告している¹⁰⁾。

学校現場の教師が、授業や学級経営等に関して、どのような困難性を抱えているのかについての調査は、少ないながら行われている。

下條ら（1996）は、小学校における教科等の指導の困難さを、小学校教師に自己評価によってアンケート調査を行い、教師は「音楽」の指導に最も困難を感じていることや、「理科」は文系と理系で指導の困難さの差が大きいことなどを明らかにしている¹¹⁾。

高平ら（2014）は、小学校教師の職務上の困難について調査し、新任時特有の困難と現在（2年目以降）の困難の度合いを明らかにする研究を行っている。この研究では、新任時と現在の分析を行い新任時に感じた困難を、「子どもとの関係」や「保護者との関係」など、13項目について調べ、「(前略:著者) 新任時には、「授業」「初任者研修」「学級経営」「軽度の発達障害が疑われる児童への対応」の4要因が他の要因よりも困難度が高かった。」ことを報告している。さらに、「一方、2年目以降の現在教師が現在抱えている問題としては、「校務分掌」と「軽度の発達障害が疑われる児童の保護者への対応」が挙げられ、次いで「授業」の困難度が高かった。」としている。そして、新任時よりも、現在の方が困難度が高かった項目は、「校務分掌」のみであった報告している¹²⁾。

安藤ら（2013）は、小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究を行い、「最も頻回に経験されている Hassles は「授業中の私語」と「保護者との話が噛み合わないこと」であった」とし、児童に関する Hassles を多く抱えている担任で、学校内の相談をより多く利用している場合は、精神的健康が改善したことを報告している¹³⁾。

1-3 問題の所在

以上のように、教師として授業や学級経営、子どもへの対応をしていくためには、高度な知識・技能が必要とされており、その知識・技能を身に付けることの必要性を現場の教師は感じていることは、先行研究でも明らかになってきている。

しかしながら、現場の教師がどのような困難性を抱えるのかの先行研究は、ストレスなどの調査や、精神疾患、メンタルヘルス、バーンアウトなどに関する研究が多く¹⁴⁾、小学校教師にとって仕事の中心的な部分を占める「授業」や「学級経営」に対して具体的にどのような困難性を抱えているのかをアンケートによって調べ、その中身を詳細に分析した研究はあまり行われていない。

文部科学省の答申にあったように、現場教師が身に付け、高める必要のある知識・技能の中心的部分は「授業」や「学級経営」に関するものであると言える。にも関わらず、教師が抱える困難性を幅広く調査した研究はあっても、学級経営と授業に特化して、具体的にどのような困難性を教師が抱えているのかの調査や、その中身に関する詳細な分析はあまり行われていないのである。

また、新卒教員のリアリティ・ショックに関する研究は多く行われているが、経験を経るごとに、授業や学級経営などに関して抱える困難性の質がどのように変わるのかについての研究は少なく、研究の余地が残されていると言える。

大学で実践的指導力を身に付けることが必要とされる現在、経験年数別に、「授業」と「学級経営」に関して、どのような困難さを小学校教師が抱えているのかを調査し、どのような知識・技能を高めたいと願っているのかを明らかにすることは、大きな意義があると考えられる。

2 研究の目的

本研究では、主に授業や学級経営に関して、小学校教師がどのような困難性を抱えているのかを詳細に調べていくこととする。また、小学校教師が、教職経験を積むことによって、抱える困難性の質が変わるのかも調べていく。

以上の二つを調べていき、小学校教師が授業と学級経営に関してどのような困難性を抱えているのかを明らかにすることを目的とする。そして、小学校教師が授業や学級経営に関して、どのような知識や技能を必要としているのか考えていきたい。

3 研究の実施方法

3-1 調査方法

現場の小学校教師にアンケートをとることにより、主に授業や学級経営において、現在どのような困難性を抱えているのかを調べることにする。

そのアンケートをもとにして、小学校教師の授業と学級経営に対する困難性を調べるとともに、教職経験を重ねることにより、抱えている困難性の質が変わるのかも調べていくことにする。

3-2 調査協力者

小学校教師を対象にアンケートを行うこととし、アンケートの協力要請は、著者が担当した研修や講座の参加者に対して行った。アンケートの内容や趣旨について著者が説明した後で、別途、参加者にアンケートへの協力を依頼し、アンケート協力で承諾が得られた場合のみ、記述してもらうこととした。アンケートを実施した研修会の詳細はアンケート回答者の情報漏洩を防ぐために伏せることとするが、アンケート

実施時期は、2017年2月から8月にかけてである。

アンケートは、142名に依頼し、101人（男性52名、女性49名）から回答を得ることができた。その内訳は、経験5年未満の教員が、23名（男性12名、女性11名）、5年以上10年未満教員が30名（男性18名、女性12名）、10年以上20年未満教員が24名（男性9名、女性15名）、20年以上教員が24名（男性13名、女性11名）であった。

3-3 調査内容

質問内容は、「問1 現在、授業において、悩んでいることや、改善したいことはありますか。複数ある方は、全てお書きください。」「問2 現在、学級経営において、悩んでいることや、改善したいことはありますか。複数ある方は、全てお書きください。」である。問1も問2も共に、複数回答ありとし、できるだけ広範囲の困難性を調べることができるようにした。

3-4 分析方法

問1と問2では、教員経験年数によって困難性の質の違いがあるのかを調べるため、教員経験年数ごとに、主な回答を挙げていくことにする。

また、様々な回答が予想されるため、分析方法としては、回答の種類ごとに、いくつかの特徴的なカテゴリーに分けて、カテゴリーごとの割合を分析し、考察していくこととする。授業と学級経営に関する困難性を調べることで、授業と学級経営に必要な知識と技能を考えていくことができるようにするため、分類の仕方は、授業に関するアンケートの回答は、授業自体を進めるための知識と技能に関する内容で分類をすることとし、学級経営に関するアンケートの回答は、学級経営自体を進めるための知識

と技能に関する内容で分類することとした。

さらに、教員経験年数によって、困難性の質の違いがあるのかどうかを調べるため、教職経験年数をいくつかのカテゴリーに分ける必要がある。経験年数5年目あたりから教師としての経験を積み、授業や学級経営もスムーズに進められることが考えられ、その後も、経験10年で一通り、授業や学級経営に慣れてきて工夫もできることが考えられる。さらに、経験20年以上の教員は、学年主任や研究主任など重要な役割を担うようになり仕事の内容が変化することも予想されるため、4群比較（5年未満、5年以上10年未満、10年以上20年未満、20年以上）を行うことにする。なお、統計解析は、サンプル数が少ない場合や回答に偏りがある場合に備え、Fisher's exact testを用いることとした。最初に、4群全体をFisher's exact testで検定し、有意だった場合は対比較をFisher's exact testで行った。対比較において、検定の多重性の調整のためにP値をBonferroni法で調整した。

4 小学校教師へのアンケートの結果

4-1 授業に関する困難性の結果

小学校教師は年齢別にどのようなことに悩みを感じているのか、アンケートによって調べた。問1は、「現在、授業において、悩んでいることや、改善したいことはありますか。複数ある方は、全てお書きください。」である。

回答は、経験5年程度から教職にも慣れてくることが考えられるため、「5年未満、5年以上10年未満、10年以上20年未満、20年以上」の4つのカテゴリーでそれぞれ示すこととした。なお、回答の中には長文に及ぶものもあったが、個人情報の保護のため、回答の趣旨は変えない形で、要約することとした。主な回答を以下に示す。

【経験 5 年未満】

- ・受けてきた授業とすべき授業に差がある (4 年目男性) 【分類⑤】
- ・このような授業で正解なのかわからない場合がある (3 年目男性) 【分類②】
- ・見やすく効果のある板書 (2 年目男性) 【分類②】
- ・楽しく分かりやすい授業の工夫 (3 年目男性) 【分類②】
- ・子どもが主体となる授業づくり (1 年目女性) 【分類③】
- ・授業が 45 分で終わらない (3 年目女性) 【分類②】
- ・ADHD の子の対応 (2 年目女性) 【分類⑦】
- ・教材の工夫、指示の出し方 (3 年目女性) 【分類②】
- ・活動しているときと話を聞くときのけじめ (5 年目女性) 【分類①】
- ・教師のしゃべりすぎをなくしたい (4 年目男性) 【分類②】
- ・手が挙がりづらい (2 年目男性) 【分類①】
- ・発問について (2 年目女性) 【分類②】
- ・教科書 (指導書) 通りの授業しかできず、子どもたちがぐいつくような授業づくりをしたい (2 年目男性) 【分類②】
- ・本当に正しい指導なのかわからない (3 年目男性) 【分類②】
- ・子ども達同士の意見のつなげ方 (4 年目女性) 【分類②】
- ・課題の設定の仕方 (3 年目男性) 【分類②】
- ・子どもたちに問題の見つけさせる方法が分からない (2 年目女性) 【分類④】

【経験 5 年以上 10 年未満】

- ・クラスのざわつき (7 年目女性) 【分類①】
- ・教師の発言をもっと減らして、子どもたち主導で流したい (9 年目女性) 【分類③】

- ・児童が課題発見→追求→新たな課題発見といったスパイラル性のある授業 (計画) があまりできていない (8 年目男性) 【分類③】
- ・新しい実践をしたい (10 年目女性) 【分類⑤】
- ・学力が低い児童が主体的に授業に参加できる手立て (9 年目男性) 【分類⑦】
- ・意欲を持たせる授業づくり (7 年目女性) 【分類③】
- ・子どもが主体的に頭をはたらかせて、学ぶ時間がとれているか (10 年目女性) 【分類③】
- ・特別支援が必要な子への対応 (10 年目女性) 【分類⑦】
- ・考えを深め、広げること (9 年目男性) 【分類④】
- ・もっと子どもたちが自分たちで考えを深め合えるような話し合いができるように授業をしたい (7 年目男性) 【分類③】
- ・意欲を高める授業 (7 年目男性) 【分類③】
- ・もっとわかる、楽しい授業がしたい (10 年目女性) 【分類②】
- ・授業の展開がワンパターンになりがち (8 年目女性) 【分類②】
- ・多くの子が表現できる場をつくりたい (7 年目男性) 【分類③】
- ・歌の指導 【分類⑥】

【経験 10 年以上 20 年未満】

- ・説明しすぎて時間が足りなくなる。(14 年目女性) 【分類②】
- ・自主性・主体的に学ぶ姿勢までいけてない (11 年目女性) 【分類③】
- ・一人一人の児童にあった指導をしたいのだが、なかなかうまくいかない (20 年目男性) 【分類⑦】
- ・授業と学級経営の連動ができない (15 年目男性) 【分類⑧】
- ・興味のあることも違う児童への授業の組み

- 立て方 (18年目女性) 【分類③】
- ・教師がしゃべりすぎてしまう (18年目女性) 【分類②】
 - ・立ち歩いたり、集中できない児童に対する対応 (12年目男性) 【分類⑦】
 - ・活用力・表現力・思考力の育て方 (11年目女性) 【分類④】
 - ・学力をあげることができてない (11年目女性) 【分類⑦】
 - ・興味のある子や、意欲的な子中心で授業が進む (17年目女性) 【分類③】
 - ・低学力の子への支援 (11年目女性) 【分類⑦】
 - ・子どもに考えさせられる発問とはどんなものか (12年目女性) 【分類②】
 - ・問題解決的な授業のつくり方 (11年目男性) 【分類④】
 - ・特別支援を要する児童に対する手立て (12年目女性) 【分類⑦】
 - ・発問のつくり方 (12年目男性) 【分類②】
 - ・授業規律の定着 (12年目女性) 【分類①】
 - ・個別・ペア・グループ (班) での学習をどう使い分けるか (13年目男性) 【分類②】
 - ・主体的・対話的で深い学びがイメージしにくい (15年目男性) 【分類⑤】
- 【経験 20 年以上】
- ・言語活動と音楽科の連動 (24年目女性) 【分類⑤】
 - ・低位の児童の学力の向上 (30年目男性) 【分類⑦】
 - ・45分間授業に集中できない児童への手立て (38年目女性) 【分類⑦】
 - ・学力差が大きく、どのレベルに合わせて授業を進めていくか (31年目男性) 【分類⑦】
 - ・授業での教師の出番 (22年目女性) 【分類③】
 - ・アクティブ・ラーニングについて (33年目女性) 【分類⑤】

- ・ICTのスキル向上 (32年目男性) 【分類⑤】
- ・自信もって大きな声で発言する (30年目男性) 【分類①】

授業に関する困難性に対して、特徴的な回答をまとめて、分類すると、次のように分類することができた。

①「授業のよい雰囲気づくり、規律やマナーに関する悩み (おしゃべりが多い 騒がしい、発表を聞く態度など)」、②「発問や指示、説明、板書などの一斉授業の進め方に関する悩み (教師の説明が長くなる、板書の仕方、学習形態の工夫 (グループでの活動など)、教材の工夫、発言のさせ方、評価など)」、③「教師主導で授業を進めていて、子ども主体になっていない悩み (学習者への意欲づけに対する悩みも含む)」、④「知識や技能など目に見える学力ではなく、思考力などの目に見えない学力を伸ばすことに関する悩み」、⑤「新しく求められている授業に対応する上での悩み (言語活動、アクティブラーニング、ICT活用、新しい学習内容など)」、⑥「苦手な教科など、特定の教科に関する指導法の悩み」、⑦「学力低位、発達障害など、配慮を要する子への対応への悩み」、⑧「その他 (教材研究の時間がない、忙しい、指導すべき内容が多すぎる、主任などの仕事が増えて大変、設備が乏しいなど)」の8つである。上記の回答に、【 】の中に分類番号として示してある。

有効回答数 101 名の回答割合 (複数回答可) を算出し、これらの8つそれぞれのカテゴリーにおいて、教員の経験年数によって、困難性への認識に差があるのかを調べるため、4群 (5年未満、5年以上10年未満、10年以上20年未満、20年以上) に分けて、Fisher's exact test で解析したところ、表1の結果となった。

4-2 学級経営の関する困難性の結果

学級経営の困難性に関して、経験年数別どのような困難性を感じているのかを調べるためのアンケートを行った。質問項目は、問2「現在、学級経営において、悩んでいることや、改善したいことはありますか。複数ある方は、全てお書きください。」である。回答で長文のものがあつたが、個人情報保護のため、趣旨を変えないよう要約することとした。主な回答を以下に示す。

【経験5年未満】

- ・忘れ物をなくすための指導(2年目女性)【分類①】
- ・まわりに流される子が多い(3年目男性)【分類①】
- ・学級規律(5年目女性)【分類①】
- ・子どもたちで目標設定させたいができない(2年目男性)【分類③】
- ・友だちを思いやった言動を多くすることが難しい(2年目女性)【分類②】
- ・ルールがなかなか定着しない(2年目男性)【分類①】
- ・子どもとのコミュニケーションのとり方(4年目男性)【分類①】
- ・交流学級との連携(3年目女性)【分類④】
- ・前に出づらい児童が多い(3年目女性)【分類①】
- ・もっと遊ぶ時は遊ぶ、集中する時は集中するというようにメリハリをつけたい(2年目男性)【分類①】

【経験5年以上10年未満】

- ・学級経営のアイデアがほしい(7年目男性)【分類⑥】
- ・温かいクラスづくり(7年目男性)【分類②】
- ・特別支援の子への対応(10年目女性)【分

類④】

- ・友達と認め合う雰囲気(6年目男性)【分類②】
- ・宿題をしてこない子への対応(6年目男性)【分類①】
- ・注意をされても素直にきくことができない児童への指導の仕方(8年目女性)【分類①】
- ・不登校児童への対応(6年目男性)【分類④】
- ・女の子の人間関係を改善(10年目女性)【分類②】
- ・全員がお互いを認め合える学級づくり(7年目男性)【分類②】
- ・子ども同士のつながりの希薄さ(10年目男性)【分類②】
- ・自治的な動きが弱い(7年目男性)【分類③】
- ・一人一人が活躍できる場づくり(10年目女性)【分類②】
- ・温かい学級にしたい(7年目女性)【分類②】
- ・忘れ物、宿題をやってこない子への対応(10年目男性)【分類①】
- ・規律はあるが、子どもの自発性を引き出すことが難しい。(8年目男性)【分類③】
- ・教師不在の時ざわつきがある。自律する子ども達になる導き方(7年目女性)【分類③】
- ・

【経験10年以上20年未満】

- ・ある程度規律が守れるようになった後の学級の運営の仕方(12年目女性)【分類③】
- ・子ども同士をつなぐのが難しい(15年目男性)【分類②】
- ・いつも同じパターンになりがちなので、新しい雰囲気に変えていきたい(15年目女性)【分類⑥】
- ・けじめがなかなかつかない場面が多い。(12年目女性)【分類①】
- ・規範意識をどのように育むか(12年目男性)

【分類①】

- ・人と助け合えるクラスづくり(12年目女性)

【分類②】

- ・保護者への働きかけ(11年目女性)【分類⑤】

- ・発達障害への対応(17年目女性)【分類④】

- ・自ら気づき自ら動く子の育成(11年目女性)

【分類③】

- ・押しつけがましい指導になる(15年目男性)

【分類③】

- ・困ったことは全部教師に報告しに来て、教師に頼っていること(14年目女性)【分類③】

【経験20年以上】

- ・一人一人、自信をもたせること(30年目男性)【分類②】

- ・アスペルガーなど、特別支援を要する子への対応(31年目女性)【分類④】

- ・特別支援を要する子に対する他の子どもたちの理解(32年目女性)【分類④】

- ・もっと「自治」の力をつけたい(31年目女性)【分類③】

- ・いじめへの指導(22年目女性)【分類①】

- ・保護者対応が難しい(33年目女性)【分類⑤】

学級経営に関する困難性に対して、特徴的な回答をまとめて、分類すると、次のように分類することができた。

- ①「秩序のある安心・安全な環境をつくることに関する悩み(いじめや差別への対応、学級経営のルール・マナー・モラルの構築など)」、
- ②「よりよい集団づくり、支持的なムードづくりに関する悩み(子ども同士の関係づくりなど)」、
- ③「教師主導で、自立を促す学級経営ができていないことに関する悩み」、
- ④「発達障害や、問題を抱えた子への個別対応に関する悩み(不登校、トラブルが起きたときの対応、ほめ方・叱り方など)」
- ⑤「保護者対応」、
- ⑥「そ

他(若手教師の育成など)」である。上記の回答に、学級経営のどの困難性がどの分類にあたるのか、【 】の中に分類番号として示してある。

有効回答数101名の回答割合(複数回答可)を算出し、これらの6つそれぞれのカテゴリにおいて、教員の経験年数によって、困難性への認識に差があるのかを調べるため、4群(5年未満、5年以上10年未満、10年以上20年未満、20年以上)に分けて、Fisher's exact testで解析したところ、表1の結果となった。

5 考察

5-1 授業における困難性に関する考察

授業における困難性は、8種類に分類することができた。

①「授業のよい雰囲気づくり、規律やマナーに関する悩み」では、授業中にざわつきがあったり、おしゃべりがあったり、聞く態度が定着しなかったりと、よい雰囲気づくりや授業規律やマナーを定着させることに困難性を感じているという回答が見られた。このような授業における「よい雰囲気」づくりは、授業規律やマナーを含めた、望ましい学習の仕方を子どもたちに確認した後で、規律違反やマナー違反があったら、その都度、再度確認したり、指導したりすることで、4月から5月までぐらいには、比較的すぐにつくることができると考えられる。また、新卒教師を含めた若手教師でも、規律やマナーを定着させる指導の方法を知っていれば、学級びらきから5月までには、授業の「よい雰囲気」は比較的簡単につくることができると考えられる。にも関わらず、経験年数によらず、ベテランでも、授業の雰囲気づくりや規律・マナーの定着に悩んでいる実態が挙げられていた。よい授業の雰囲気をつくり、授業規律やマ

ナーを定着させることは、授業を行う上での前提条件のようなのだと考えられるが、その前提条件ですら成立させるのに困難さを抱えている実態が示唆される結果となった。

②「発問や指示、説明、板書などの一斉授業の進め方に関する悩み」は、教師が身に付けておこななくてはならない、授業の基本とも言える内容であると考えられる。例えば、発問の仕方や、説明の仕方、板書の仕方は、どの教師でも一斉授業をする上では、できなくてはならないことであり、新卒教師にも必要とされる力であると言える。また、この悩みの中には、グループ活動の仕方など、学習形態の工夫ができないこと、発言の取り上げ方が分からないこと、評価の仕方、教材の工夫の仕方などが、困難性として挙げられていた。グループ活動や協働的な学習など、学習者中心の授業を行うとしても、一斉授業あつてのことであると考えられるが、全体として割合を見ると、②の困難性が、33.7%最も多く回答されていた。一斉指導の仕方という基本とも言える内容について現在悩んでいて困難を抱えていると答えた教師が多かったことは、学校が置かれている社会的な環境にも一部起因していると考えられるが、「発問の作り方が分からない」、「教材の工夫、指示の出し方が分からない」といった具体的な授業のやり方に関する悩みを抱えている回答が多かったことから、一斉授業の仕方を身に付けていないことが主たる要因であることが考えられる。

③「教師主導で授業を進めていて、子ども主体になっていない悩み」では、「子どもたち主導の授業のやり方」や「主体的に頭をはたかせるやり方」などの悩みが挙げられており、一斉授業はできるようになっても、学習者主体の学習を成立させるのが困難であることを示している。つまり、一斉授業のやり方を習得できても、学習者主体の探究学習や自律学習、協働的

な学習、主体的学習を成立させることは、また違った知識や技能が必要とされることが考えられる。

④「知識や技能など目に見える学力ではなく、思考力などの目に見えない学力を伸ばすことに関する悩み」では、活用力や表現力、思考力などの育て方に関する困難性が挙げられていた。これまでの学習指導要領でも、思考力・判断力・表現力等といった思考・判断の力を育てることは重視されており、知識や技能を活用する力も重視されてきた。2017年3月に改訂された新しい学習指導要領でも、「(1) 知識及び技能が習得されるようにすること。(2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。(3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。」を実現するように明示されている¹⁵⁾。

特に、思考・判断の力や、知識・技能を活用できる力を育てるや、目に見えにくい学力である非認知的学力も育てることが重視されていることから、このような困難性を挙げる教師が多いのだと考えられる。つまり、目に見える知識や技能の習得は、授業の中で保障することができても、思考力・判断力・表現力等の力の育成や、学びに向かう力、人間性等を涵養することは、また別の指導の知識や技能が必要とされるため、実現に困難を感じていることが考えられる。

⑤「新しく求められている授業に対応する上での悩み」では、言語活動の充実や、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の実現、ICT活用方法、新しい学習内容への対応などが挙げられていた。日々の授業に加えて、新しくやり方を工夫した授業を行う必要があるため、困難性を抱えているのだと考えられる。

⑥「苦手な教科など、特定の教科に関する指導法の悩み」は、音楽科や国語科など、特定の教科に関して、授業の進め方が分からないとい

う悩みが挙げられていた。これは、小学校教師が自分の専門教科以外の教科も教える必要があるために、困難性を感じているのだと考えられる。

⑦「学力低位、発達障害など、配慮を要する子への対応への悩み」は、教室にいる配慮を要する子へ、授業の中でどのように関わっていけばよいのかに関する困難性である。特に、学力差に対する対応の仕方や、学力の底上げの仕方、個別の支援が必要な子どもにどのような支援をすればよいかなどが、悩みとしてあげられていた。一斉指導の仕方を身に付け、授業全体を展開することができても、その展開のついてこれない子どもがいると考えられ、どのような個別対応をすればよいのかで悩んでいるのだと考えられる。学力や発達障害などに配慮をしながら授業を行うことができるためには、一斉指導における授業展開に必要な知識・技能とは、別の知識や技能が必要になることを示しているのだと考えられる。

⑧「その他」は、教材研究の時間不足や内容の増加に関する悩みなどであり、授業自体の悩みというよりは、学校のシステムや、教師の仕事のあり方の問題だと考えられる。また、一部の回答に、授業と学級経営を連動させることの困難性が示されていたが、授業自体を進めるための知識や技能に関する悩みではないと考えられる。そのため、上記の全てを、授業を進める上での知識や技能とは直接関係ないと考え、その他に分類することとした。

以上に見てきたように、一斉授業のやり方に悩みがなくても、その他の悩みを挙げている教師が数多くいることは、一斉授業のやり方を習得したとしても、学習者の主体的な学習を実現することや、目に見えない学力を向上させること、新しい授業の実現、配慮を要する子への対応などを習得することの困難性を示しているの

だと考えられる。つまり、一斉授業以外の悩みには、一斉授業のやり方とはまた違った知識・技能が必要とされ、授業の知識・技能の習得に大きなステップがあるのだと考えられる。

5-2 学級経営における困難性に関する考察

学級経営に関する困難性に対して、特徴的な回答をまとめて、分類すると、次の6種類に分類することができた。

①「秩序のある安心・安全な環境をつくることに関する悩み」は、学級のよい雰囲気をつくることに関する困難性であり、学級経営において最も基礎的な指導に関する悩みであると考えられる。秩序のある安心・安全な環境をつくることは、4月の最初に指導を行うべきものであり、なるべく早く成立させることができなくてはならないと考えられる。4月最初に、いじめを防止することや、学級のルールをつくる必要があり、そのことによって秩序のある安心・安全な環境をつくることのできる。このような、よい雰囲気をつくることのできる学級経営の知識や技能を習得しておくことは、新卒から学級を受けもつことになる小学校教師には必須となるとい考えられるが、全体の19.8%と、最も多くの回答が見られたことから、この段階で困難性を抱えている実態が、示唆される結果となった。経験年数5年未満の教員は、5年未満教員全体の34.8%が、この項目について回答しており、若い教師ほど、忘れ物の指導法など、より基礎的な指導内容でつまづいていることがアンケートから読み取ることができた。

②「よりよい集団づくり、支持的なムードづくりに関する悩み」は、①の秩序のある安心・安全な環境をつくった上で、その後で達成できる学級経営の内容だと考えられる。それゆえ、ルールやマナーを定着させ、差別を減らすことができたとしても、その後の指導で、子ども同

士のつながりを強化したり、認め合う雰囲気をつくり出したりするなど、学級をよりよくするための取り組みでつまづいているのだと考えられる。

③「教師主導で、自立を促す学級経営ができていないことに関する悩み」は、①と②が達成できてた後で学級経営の工夫として取り入れられる内容だと考えられる。教師主導の学級経営はできていても、自立を促す学級経営ができていないということは、教師主導の学級経営と、自立を促す学級経営で、必要となる学級経営の知識と技能が違うことが考えられる。また、教師主導で①と②が達成できていたとしても、③を達成することに別の困難さがあることが予想される。

④「発達障害や、問題を抱えた子への個別対応に関する悩み」では、発達障害の子への対応や、不登校への対応、トラブルが起きたときの対応、ほめ方・叱り方などの指導法に関することが挙げられていた。これは、学級経営において、個別の子ども対応が一つの大きな要因となっており、個別の子ども対応の指導法を学ぶ必要があることを示しているのだと考えられる。

⑤「保護者対応」は、保護者との連携の仕方や、働きかけが難しいことが挙げられており、家庭との連携の仕方という知識・技能が必要になることが考えられる。

⑥「その他」には、年配教師が若手教師の育成に関して悩みを抱えているなど、学級経営自体の知識・技能とは質が異なると考えられる回答を入れることとした。また、学級経営全般のアイデアがほしい、例年同じパターンになるなど、教師個人に関する悩みと考えられるものは、学級経営自体を進めるための知識・技能とは分けることとし、その他に分類することとした。

5-3 経験年数別の困難性に関する考察

最初に授業に関して、経験年数別の困難性を考えていく。

①「授業のよい雰囲気づくり、規律やマナーに関する悩み」及び④「知識や技能など目に見える学力ではなく、思考力などの目に見えない学力を伸ばすことに関する悩み」、⑤「新しく求められている授業に対応する上での悩み」、⑥「苦手な教科など、特定の教科に関する指導法の悩み」は、4群間で有意差はなく、人数は少ないながらも、若い教師でもベテラン教師でも一様に困難性を感じていることが考えられる。

①の授業のよい雰囲気づくりに関する指導は、授業を成立させるための前提とも言える指導であるが、「規律が定着させられないこと」や、「ざわつきが抑えられない」、「進んで発表するような雰囲気をつくれな」といった悩みが挙げられていたことから、規律やマナー、よい雰囲気づくり方の指導の仕方を知れば解決できる問題であると考えられる。①に関しては、全体的な傾向として、経験年数が少なくなるほど、授業のよい雰囲気をつくれておらず、例えば45分で授業が終わらないことや、けじめのない行動がある問題、挙手しない雰囲気など、授業の体をなしていない様子がかがわれる結果となった。経験年数によらずベテランでも①のような困難性を感じているということは、①に関する知識や技能を磨く研修場が必要であることが考えられる。

一方で、④や⑤に関する困難性は、新しい学力観や、新しい教育方法に関して対応していく上での困難性であり、これからの時代に新しく求められる内容であるからこそ、経験年数によらず等しく困難性を感じているのだと考えられる。⑥は、小学校教師が様々な教科を担当する必要があることから、それぞれの教科の習熟に

時間がかかるため、経験年数によらず、困難性の回答が出ているのだと考えられる。

②「発問や指示、説明、板書などの一斉授業の進め方に関する悩み」は、経験5年未満の教師が悩みとして挙げる割合が最も高く、若い教師ほど一斉授業の進め方に関して悩んでいる実態が示唆される結果となった。Fisher's exact testで全体を解析したところ、統計的有意差を認めた ($P<0.001$) ため、続けて Fisher's exact test で群間比較を行ったところ、5年未満群と5年以上10年未満群 ($P=0.026$)、5年未満群と20年以上群 ($P<0.001$) 間で統計的有意差を認めた (群間比較において、検定の多重性の調整のために P 値を Bonferroni 法で調整した。以下同様である。)。5年未満群と、10年以上20年未満群では、有意差はなかったものの、全体的に見れば、5年未満群で②に関する悩みを抱えている教員が多いことから、一斉授業の進め方でつまづいているのは、経験5年未満の若い教師により多いことが考えられる。

③「教師主導で授業を進めていて、子ども主体になっていない悩み」では、経験5年以上10年未満の教師で回答した割合が多く、②の悩みとは反対で、経験5年未満の教師は、悩みとして挙げた教師はほとんどいなかった。Fisher's exact testで全体を解析したところ、統計的有意差を認めた ($P=0.001$) ため、続けて Fisher's exact test で群間比較を行ったところ、5年未満群と5年以上10年未満群 ($P=0.020$)、5年以上10年未満群と20年以上群 ($P=0.018$) 間で統計的有意差を認めた。このため、5年以上10年未満群でより③に関する困難性を抱えていることが考えられ、少し経験を積んだ頃に困難性を感じる事がうかがわれる結果となった。ただしこれは、若い教師が③について悩んでいないという実態を示しているのではなく、②のアンケートの解析結果からも、若い教師は、

③の前段階である「教師主導の一斉授業」で、つまづいているのであり、一斉授業のやり方自体が分からず、悩んでいるのだと考えられる。つまり、教師主導の一斉授業のやり方にだんだんと習熟してきた経験5年以上の教師が、教師主導の授業だけでなく、子ども主体の授業も成立させたいという願いをもつようになり、悩みを抱える状態になっているのだと考えられる。

⑦「学力低位、発達障害など、配慮を要する子への対応への悩み」はベテラン教師の方が、困難性として挙げている割合が高かった。Fisher's exact testで全体を解析したところ、統計的有意差を認めた ($P=0.047$) ため、続けて Fisher's exact test で群間比較を行ったところ、統計的有意差は認められなかった。学力低位、発達障害など、配慮を要する子への対応には、ベテランも若手も同様に悩んでいるものと推察されるが、ベテラン教師の方が困難性の割合が高かったのは、ベテランになるほど、配慮を要する子へ対応を悩んでいるというよりは、一斉授業、主体的学習などの授業自体を工夫して実行するという、前段階で若手教師はより困難性を感じており、配慮を要する子への対応を挙げていなかったためと考えられる。ただし、ベテラン教師の割合が多いという事実は、配慮を要する子への対応に関する知識と技能の習得は、経験を積みばできるというものでもないことを示唆しているのだと考えられる。

授業に関する回答全体の傾向を見ると、経験年数5年未満の教員の特徴的な回答として、「本当に正しい指導なのかわからない」、「このような授業で正解なのかわからない場合がある」というものがあつた。これは、よい授業のモデルを意識できておらず、よい授業のイメージがないままに、日々の授業を行っている現状が浮き彫りになったのだと考えられる。このことは、教員養成課程でも、よい授業モデルを示してい

ない現状が示唆される結果となった。なお、経験5年未満でも、「受けてきた授業とすべき授業に差がある」といった回答もあることから、「すべき授業」、つまりよい授業のイメージはもっている教師はいることが推察される。しかしながら、経験20年未満までの回答で、よい授業イメージはあっても、それが成立させられない困難性が多く挙げられており、よい授業イメージをもっていたとしても、その授業を実行するまでに困難性があるのであり、理解しただけでは、よい授業はできず、さらに知識と技能の習得や修練が必要になるのだと推測される。つまり、知識として知っているだけでは不十分であり、技能として身に付ける研修の場が必要となることが考えられる。

次に、学級経営に関して、経験年数別の困難性を考えていく。学級経営に関する問2の回答を、Fisher's exact testで全体を解析したところ、統計的有意差を認めたものはなかった。ただし、全体的な傾向として特徴的なものが出ていることが明らかとなった。

①「秩序のある安心・安全な環境をつくることに関する悩み」は、有意差こそないものの、経験5年未満の教員が最も多く悩みとして挙げていた。

②「よりよい集団づくり、支持的なムードづくりに関する悩み」は、有意差はないが、経験5年以上10年未満の教員が、最も多く悩みとして挙げていた。

③「教師主導で、自立を促す学級経営ができていないことに関する悩み」は、有意差はないが、経験10年以上20年未満の教員が最も多く悩みとして挙げていた。

学級経営は、①をまず一番に成立させることができなくてはならず、①ができた上で、だんだんと②の要素が成立していき、最後に③の要素が成立するという構造がある¹⁶⁾。つまり、

比較的知識と技能の習得が簡単なのは、①であり、順に②、③の要旨となる。そして、学級経営においては、①を土台として学級びらきからできるだけ早く成立させる必要があり、順に②、③へと指導が移行していくこととなる。

その上で、全体的な傾向として、①で5年未満群が最も多く困難性を抱えており、②は、5年以上10年未満群が最も多く困難性を抱えており、さらに③は10年以上20年未満群が最も多く困難性を抱えているという結果は、先に示した授業の困難性と同一構造をもっていることが推察される。つまり、全体的な傾向が示すことは、若い教師ほど、学級経営において一番に成立が必要とされる①の要素すら成立させることができずに深刻に悩んでいる実態が示唆され、経験を積むごとに、①に関する困難性は減っていき、順に②、そして③へと悩む種類が変わってくるのだと考えられる。すなわち、①から②、そして③は、教師に必要とされる知識と技能が異なり、①から③へと順番により高度な知識・技能になるのだと考えられる。

④「発達障害や、問題を抱えた子への個別対応に関する悩み」は、ベテラン教師でも若手教師の割合に比べて多くの教員が悩んでおり、個別対応には専門的な知識や技能が必要とされ、担任経験を重ねれば困難性が解決されるわけではないことが考えられる。また、⑤「保護者対応」は、ベテラン教師だけが挙げていた結果となった。これは保護者の実態によって変わるため、特に年齢別の有意差はないのだと考えられる。

経験年数の少ないうちに悩んでいる悩みの中には、大学の教員養成課程で修得ができると考えられるものもあり、「よい授業のモデルを見せること」や、「授業規律・マナーの成立」、「一斉授業のやり方」、学級経営における「秩序のある安心・安全な環境をつくる」などは、大学

でも十分教授できるものと考えられる。

また、学級経営においても、「秩序のある安心・安全な環境をつくること」は、学級経営の基礎的な知識・技能であり、大学の教員養成課程でも十分に修得させられると考えられる。

6 結論と今後の課題

今回の研究で、小学校教師が具体的にどのようなことに困難性を感じているのかについて、小学校教師の仕事の中心となる「授業」と「学級経営」において、具体的な困難性を調べ、その困難性の分類ができたことは、一つの成果であると考えられる。また、授業の面でも、学級経営の面でも、多くの教員が困難性を感じており、詳細に中身を分析していくと、経験年数によって、困難性の質に違いがあることが明らかとなったことも成果の一つである。

具体的な回答を見ると、授業のやり方が分からない、学級経営の進め方が分からないといったものが主な回答であったことから、授業や学級経営に関する指導をどう進めればよいのかに困難性を感じていることが示唆され、経験年数別のアンケート回答数の偏りから、特に若手教師は、授業と学級経営に関して、基本段階の指導に困難性を抱えており、ベテランになるにつれて、だんだんと高度な指導法に関する困難性を抱えることが考えられる結果となった。

ただし、授業のよい雰囲気づくりなど、授業を行う上で前提となる指導は、経験年数によらず困難性が挙げられており、知識と技能を磨く研修が必要なのだと考えられる。

また、一斉授業の方法や、秩序のある安心・安全な環境をつくることなどの知識・技能は、授業と学級経営の基礎であり、土台となる教育の技術や方法であると考えられ、できるだけ早いうちに習得させておく必要があるのだと考え

られる。つまり、「秩序のある安心・安全な環境をつくることに関する悩み」や、「発問や指示、説明、板書などの一斉授業の進め方に関する悩み」に対応するための知識・技能の習得が、教員養成段階において必要なのではないかと示唆される。

教職経験を積み重ねるにつれ、教員向けの研修内容も変化させる必要があり、中堅やベテラン教師に近づくにつれ、授業では、「教師主導で授業を進めていて、子ども主体になっていない悩み」、学級経営では、「よりよい集団づくり、支持的なムードづくりに関する悩み」や、「教師主導で、自立を促す学級経営ができていないことに関する悩み」に対応した研修が必要なのだと考えられる。また、知識として理解はできていても、技能として高める必要のある内容もあると考えられ、ロールプレイや模擬授業などを行って、技能を高める研修の場も必要となることが考えられる。

今後の課題として、教員養成段階においても、授業と学級経営の基礎的な内容は確実に修得させる必要があり、十分に修得させられる内容は何かということを議論することが必要になると考えられる。

また、基礎から一歩進んだ、より高度な知識・技能を、教員養成課程や教員になった後の研修等において、どのように身に付けていけばよいのかを考えることが必要になるだろう。

今回の研究では、主に授業や学級経営自体を進めるための知識と技能に関する「困難性」に焦点を当てて研究を行い、具体的な回答の結果から、授業や学級経営の知識や技能の習得と困難性との関わりを考察したが、学校環境や社会的環境など、その他の要因が困難性へとつながっていることも考えられる。今後は、社会的要因も含めての調査なども行う必要があるだろう。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました教育委員会、小学校関係者の皆様に記して感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省中央教育審議会(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」
- 2) 文部科学省初等中等教育分科会教員養成部会(2015)『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)』
- 3) 辻信吉(1959)「新卒教員からみた「教員養成」の反省と批判」, 文部時報 977, pp.18-27
- 4) 例えば、以下の論文がある。高橋佳代・日高和美・白石忍(2014)「新卒教員の適応感と支援ニーズに関する一考察: 卒後1年目の追跡調査をもとに」, 九州共立大学研究紀要 4 (2), pp.87-92, 山本利一, 祐安裕美, 牧野亮哉(2004)「新採用教員が抱える教科指導の課題点と効果的な支援の在り方」, 埼玉大学紀要教育科学 53 (1), pp.21-27, 森田英嗣(2014)「授業実践にかかわる課題からみた「サバイバル期」の諸相と養成教育・初任期教育への示唆: 小学校初任者教員はどのような課題に直面するか」, 教育実践研究 (8), pp.39-54, 大前暁政(2016)「小学校初任者教員の現場適応の困難性と教員養成課程で身に付けるべき教師力の意識に関する研究」, 心理社会的支援研究 6, pp.3-20
- 5) 松浦善満・中川崇(1998)「子どもの新しい変化(「荒れ」と教職に関する研究: 小中学校の担任教師調査結果から(教育臨床・学校教育相談研究プロジェクト)」和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 8, pp.1-10, 佐藤学(1999)「「学級王国」の崩壊としての「学級崩壊」」, 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, p.5
- 6) 平田幹夫(1999)「学級崩壊に関する一考察」琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要 (7), pp.11-24
- 7) 小橋繁男(2013)「小中学校教師のストレスとバーンアウト, 離職意思との関係」, 日本保健科学学会誌 15 (4), pp.240-259
- 8) 川瀬隆千(2014)「宮崎市における教師バーンアウトの実態」, 宮崎公立大学人文学部紀要 21 (1), pp.35-51
- 9) 松本浩二・田所撰寿・下司昌一(2011)「教育現場における心理サポートの在り方: 教師の抱えるストレスに誰がどう対応するのか」明治学院大学心理学部附属研究所年報 (4), pp.35-47
- 10) 石田美清(2008)「教師の抱える教育実践上の問題・課題への対応に関する調査 -- 総合的な学校コンサルテーションの構築に向けて」教育学研究紀要 54 (1), pp.318-323
- 11) 下条隆嗣・平田昭雄・福地昭輝(1996)「小学校における教科等の指導の困難さとその理由 -- 現職教師による自己評価」, 日本教科教育学会誌 19 (1), pp.39-47
- 12) 高平小百合・太田拓紀・佐久間裕之・若月芳浩・野口穂高(2014)「小学校教師にとって何が困難か?: 職務上の困難についての新任時と現在の分析」, 玉川大学教育学部紀要, pp.103-125
- 13) 安藤きよみ・中島望・中嶋和夫(2013)「小学校学級担任の学級運営等に関連するストレス・コーピングに関する研究」, 川崎医療福祉学会誌 22 (2), pp.148-157
- 14) 佐野秀樹(2014)「教師ストレス(バーンアウト)からの回復と予防」, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 10, pp.51-55, 奥野洋子(2013)「教師のメンタルヘルス」, 近畿大学臨床心理センター紀要 6, pp.33-41, などがある。
- 15) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領」
- 16) 大前暁政(2015)『子どもを自立へ導く学級経営ピラミッド』, 明治図書

Abstract

The Difficulties of Possessing the Knowledge and Skill Necessary for Elementary School Teachers According to the Number of Years of Teaching Experience

Akimasa OMAE

An elementary school teacher is required to teach more than one subject and master classroom management in the first. Thus, subject instruction and classroom management are important topics for an elementary school teacher. In this research, a questionnaire was administered to elementary school teachers on the difficulty of subject instruction and classroom management. The results were analyzed according to the number of years of teaching experience.

The results showed that the difficulty of subject instruction and classroom management differs according to the number of years of teaching experience. A young teacher worries about “how to simultaneously talk to many people” and “how to create an orderly class environment.” These concerns are a basic part of the knowledge and skills required for elementary school teachers. It is possible to develop a curriculum of teacher-training courses in the university to impart the knowledge and skills that elementary school teachers need.

Keywords: elementary school teachers, difficulties, subject instruction, classroom management